References

Ohashi, H. & Y. Tateishi 1976. *Mucuna macrocarpa* and *M. gigantea* (Leguminosae) in Japan and Formosa. Journ. Jap. Bot. **51**(6): 161-168. Tateishi, Y. & H. Ohashi 1981. Eastern Asiatic species of *Mucuna* (Leguminosae). Bot. Mag. Tokyo **94**: 91-105. Wilmot-Dear, C. M. 1984. A revision of *Mucuna* (Leguminosae-Phaseoleae) in China and Japan. Kew Bull. **39**(1): 23-65. Wiriadinata, H. 1989. A revision of the genus *Mucuna* Adanson (Fabaceae-Papilionoideae) in Malesia. Ph. D. Thesis, Tohoku Univ., Sendai.

* * * *

インドネシア小スンダ列島には9種のトビカズラ属植物が分布することが明らかになり，このうちの4種は新種であった。本論文ではこれら4種を記載し，類似種との相違を述べた。

□小倉洋志ほか：**八溝山地の植物相**（栃木県立博物館研究報告書第7号）448pp., 8 pl. 1989. 同博物館（宇都宮市睦町 2-2）．栃木・茨城両県境には，八溝・鷲子・鶏足の3山塊が南北に並んだ八溝山地がある。小倉氏ら12氏が那須町東部・八溝山・花瓶山・雲岩寺・羽黒神社・鷲子山・松倉山・鎌倉山・八幡山・高館山・雨巻山の11地区の植生を調査した結果の報告である。栃木県内が主となり茨城県も入る。維管束植物1706種類の目録には1万数千点の証拠標本（大部分は上記博物館所蔵）が挙がっているが，そのすべてに詳細な産地，同標高，採集年月日，花・果実などの様子，採集者名が記載されている。今回の調査で48種類が栃木県新産となった。各地域個別の植生についての説明のほかに，全体として特記すべき植物73種類，八溝山地の植物相の構成，考察などがある。八溝山地は暖温帯から冷温帯への移行帯になっていて交錯した多様な森林が見られる。暖温帯のスダジイ林は南部の茂木町八幡山まで，カシ林は北端の八溝山麓那須町伊王野までそれぞれ分布していて北限になっている。反対に冷温帯のブナ林は益子町や茂木町まで南下している。モミ林は点々と各地にあり，コナラ林・アカマツ林などの二次林や，それらと原生種との混交林も全般にわたって見られる。また日本海要素・満鮮要素などが多く混じっているのも特異なことである。種類の数からいえば，約 50% が暖・冷両温帯にわたって分布するもの，20% が暖温帯，30% が冷温帯となっている。

（伊藤　洋）